目撃後の類似性判断がラインナップ識別に及ぼす影響

○原田明典¹・鈴木直人²・越智啓太³

(¹ 法政大学大学院人文科学研究科・² 同志社大学・法政大学)

キーワード: 事後情報効果、顔の記憶、目撃証言

The influence of similarity-judgement after witness to lineup identification.

Akinori HARADA¹, Naoto SUZUKI¹ and Keita OCHI²

(¹ Graduate School of human-science, Hosei Univ., ² Doshisha Univ., Hosei Univ)

Key Words: post-event information effect, facial memory, eyewitness testimony

目 的

実際の犯罪場面における目撃者の証言は正確ではないことが示されている。目撃証言に影響を及ぼす要因として様々なものが挙げられるが、その一つとして、事後情報効果がある。(Loftus,1975; Loftus & Palmer,1974)。事後情報効果とは、目撃者が出来事を目撃した後には与えられる情報(事後情報)によって、元の記憶が歪められてしまう現象である。事後情報効果の検討について、多くの研究では、一連の出来事のスライドを見せた後に実験者が事後情報を与え、その後記憶テストを行うというものであった。これらの研究は、参加者が外部からの事後情報を与えられる、という点で受動的である。しかし、目撃者がその出来事について繰り返し考えたり、イメージするなど、能動的な要因によっても事後情報効果が生じることが示されている。Thomas & DeCapito (1966) は、色の記憶実験において、曖昧な色に対して参加者自身がどちらの色に似ているかどうかの判断を行うことで元の記憶が歪められることを明らかにした。これらは色についての研究であるが、本研究では、人物の識別、つまり顔の記憶においても参加者の能動的な類似性判断が及ぼす影響について検討を行った。目撃者は、自分自身の考えや判断を能動的に顔の記憶にも介入させている可能性があり、「犯人は、あの人に似ている」というような情報を手掛かりとして人物の識別に臨むと、それが事後情報として機能し、犯人の顔が歪められてしまうことが考えられる。

方 法

被験者 大学生 31 名(男性 14 名, 女性 17 名)が参加した。平均年齢は、20.84 歳($SD=1.46$)であった。

刺激 2 枚の顔写真を合成した画像 11 枚を用いた。各画像で、合成比率を 10%間隔で変化させた 11 枚の画像を作成した。ターゲット刺激として、50:50%の画像を、直後判断刺激として、30:70%、70:30%の画像を、再認テスト用の刺激として 0:100%~100:0%の合成した顔画像を用いた。

手続き 参加者は、無作為に判断あり群と判断なし群に分けられた。ターゲット刺激(50:50%)を 5 秒間提示し、直後に判断あり群には、直後判断刺激(70:30%, 30:70%)を対呈し、どちらに似ていると思うかの判断をさせた。判断なし群にはそのような操作は行わなかった。次に、引き算課題を 2 分間行い、その後、両群ともに再認テストを行った。再認テストは、ランダムに提示されるテスト刺激(0:100%~100:0%)に対して、ターゲット顔にどれだけ近いと思うかを 7 段階で評定させるというものであった。ここまでは 1 試行として、各参加者に対して 5 試行ずつ行った。

結 果

1 名を除外した 30 名(判断あり群 15 名, 判断なし群 15 名)のデータを分析に用いた。判断あり群では、判断の段階で 30:70%を選択した試行と 70:30%を選択した試行を同様のものとみなし、全て 30:70%を選択した試行に統合して分析に用いた。

図 1 に、各群の合成比率の平均類似度評定値を示す。群×合成比率の混合要因で、評定値(点)について二要因の分散分析を行った結果、評定値においては、交互作用が有意であった($p<.01$)。そこで、単純主効果の検定を行った結果、0:100%, 10:90%, 20:80%, 30:70%, 40:60%において群間の有意差が認められ、判断なし群の評定値が判断あり群よりも高かった($p<.05$)。また、70:30%においては有意傾向が示され、判断あり群の評定値が判断なし群よりも高かった。($p<.10$)。

図1.各群の合成比率の類似度評定値

考 察

本研究では、参加者自身の能動的な判断によって顔の記憶が歪められて再認されることが示唆された。これは、人物識別においても、目撃者が「犯人はあの人に似ている。」というような類似性の判断が、実際の証言の正確性を低下させる可能性があることを示している。しかし、参加者が似ていると判断しなかった方の顔については、判断あり群で判断なし群よりも評定値が低かったのに対し、似ていると判断した方の顔については、70:30%の顔において有意傾向が見られたのみであり、判断の効果について明確に結論付けることは出来ない。今後は、刺激や再認テストの方法を変えるなどの手続き上の問題点を改善し、能動的な類似性判断の効果について再検討することが求められる。

引用文献

- Loftus, E.F. (1975). Leading questions and the eyewitness report. *Cognitive Psychology*, 7, 560-572.
- Loftus, E.F., & Palmer, J.J. (1974). Reconstruction of automobile destruction: An example of the interaction between language and memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 13, 585-589.
- Thomas, D.R., & DeCapito, A. (1966). Role of stimulus labeling in stimulus generalization. *Journal of Experimental Psychology*, 71, 913-915.